

## 本美濃紙 / 本美濃紙についての概要

美濃国（現在の岐阜県南部）では、8世紀以前から和紙（日本の固有の製法で製造された紙）の製造を行っており、その中でも最上級のものが本美濃紙と呼ばれています。本美濃紙は軽量かつ半透明で若干の艶があり、古くなっても劣化したり黄ばむことがなく、何世代も残る丈夫さを持ち合わせています。

### 経典の書写から障子戸まで

美濃和紙は本来お寺で経典の書写に使われていましたが、その後、高級な障子戸や提灯の素材として一般的に使用されるようになりました。21世紀に入ってから、本美濃紙はその優れた手ざわりと丈夫さが評価され、世界各地の美術館で美術品の保存に使われています。本美濃紙の作り方や材料は何世紀もの間ほとんど変わっておらず、2014年にはユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録されています。

### 見かけによらずシンプルなアート

基本的に、本美濃紙の作り方はシンプルです。まず、パルプ状にほぐしたコウゾの靱皮繊維と水を混ぜ合わせます。それから、粘性分散剤を加えて繊維の固まりを防ぎ、水中で繊維が均一に広がるようにします。繊維を混ぜた液体を丁寧にすくい、目の細かい竹箆（竹の箆）で濾すと、繊維が絡み合ってきた膜を捉えることができます。その後、圧搾して余分な水分を取り除き、天日で乾燥させます。原料を準備し、それを適切に混ぜ合わせて薄くて均一な繊維の層を作れるようになるまでには、数年を要することもあります。

### 必要な材料と道具

和紙の制作には、楮（こうぞ）、ミツマタ、雁皮（アオガビ属の低木）などさまざまな植物の樹皮が用いられます。本美濃紙は、楮（こうぞ）という低木の靱皮繊維（木の根などの内側にある皮で作った繊維）を製紙用に加工した白皮から作られます。本美濃紙用の楮（こうぞ）の白皮は茨城県大子町（だいご）から調達されます。大子の楮は成長が速いため、幹が真っ直ぐで細く、丈夫で柔らかな繊維が得られるのが特徴です。

ねべしという粘度の高い物質を、水と楮（こうぞ）の繊維を入れた大きな水槽に加えると、細かい植物繊維が水中で均一に広がり、塊ができにくくなります。繊維を混ぜた液体が竹箆を通る速度も遅くなる

ため、その間、職人が紙の厚さを調整しやすくなります。ねべしは、とろろあおいという植物の根を砕いて水に浸け、透明な粘液を抽出したものです。

本美濃紙の制作に使われる道具はすべて手作りです。楮（こうぞ）の白皮を叩いてほぐす菊の花模様がほられた木製丸槌など、一部の道具は美濃地方独自のものです。道具の一つ一つをそれぞれ専門の職人が作っていますが、道具の作り手の数も減少しています。竹簧（たけす）と呼ばれる、紙を漉く際に用いられる目の細かい竹の簧を作ることのできる職人は、たったの1人しかいません。竹簧は、竹を割り、削って加工したものを3,000本組み合わせて、絹糸で編んで作ります。1つの竹簧を作るのに、通常、1週間に要します。

#### 伝統を存続させる

第二次大戦後、障子戸など、昔ながらの紙の需要は減少しました。同時に、機械化が急速に進んだことで、高品質の紙が低価格で生産されるようになりました。20世紀初め頃、美濃市には3,700箇所和紙工房がありましたが、現在では20か所以下に減少し、そのうち本美濃紙を作っているのは6か所だけです。

本美濃紙を守り、広く伝えていくため、本美濃紙保存会が結成されました。職人の技術は、親から子へ受け継がれていくことが多いですが、美濃市では、美濃和紙の伝統を守るため、研修生を受け入れています。現在、本美濃紙は、芸術作品、現代的な提灯の制作に用いられており、京都迎賓館の障子戸や照明器具にも採用されています。